

第一章 武器屋

床には木くずと鉄くず、剥き出しの作業台には油の染み。これまで住んでいた男爵家の屋敷とは、あまりにも違いすぎる光景だ。まあ、散らかっている。

「ここを掃除してくれ。雑巾とバケツはそこにある」

「はい！ 掃除します！ ご飯とベッドをありがとうございます」

「別にいいよ、それぐらい」

ガルドはぶつきらぼうに言って、作業場へ戻っていった。精悍な顔つきだし、あまり馴れ馴れしくして来ないので、信頼できる人なのかなって思う。

雑巾……、これね？

私は腕まくりをしながら、たらいを持ち井戸に行った。水を汲み、布を絞る。戻ってひざについて床を擦ると、黒ずんだ汚れがみるみる取れていく。

「……わ、気持ちいい……！　すっごい汚れてる……」

ごしごしと音をたてて磨いていくと、あっという間にたらいの水が真っ黒。直ぐに水を取り替えるために、裏手に回り水を捨てて綺麗な水に変える。

これは、やりがいがあるわ。片付けは棚でいいのよね？

誰にも命じられていないのに、自分で動いて結果が出る。初めての感覚だ。昨日、店の裏口で暴漢から助けられ、ご飯まで食べさせてもらった。それに、行くあてもない私。いまは、誠心誠意、掃除をするだけだなんて思う。

「頑張らなくっちゃ」

午前中いっぱい掃除をして数時間後、部屋が見違えるように綺麗になった。

「ふう」

ぞうきんを絞りながら汗を拭いていると、ガルドが、部屋に入ってきて笑う。

「はは！ こいつは、間違えたな。これが本来の作業台の色だ」

「片付け物は、棚に並べてみました！」

「助かるぜ。随分丁寧にやってくれたもんだ」

「うふふ」

「嬢ちゃん、そろそろ昼飯にしよう」

そしてガルドが、私を台所に連れて行く。

「ただよ、飯を作ってくれねえか」

それも、何とかなるかも。貴族といっても、男爵はそれほど裕福じゃない。メイドと母と一緒に、食事の用意くらいはした事があった。多分出来るはず。

「その棚の食材、好きに使っていいぜ」

「やります！」

私は使い慣れない道具と格闘しながら、スープ、炒め物を一皿ずつ作って、パンを棚から取って切り出し、食卓に並べていく。そして店から彼を呼んだ。

「お昼ご飯出来ましたよ」

「おお、いい匂いだな」

「お口に合うかどうか」

二人が食卓に座り、私が祈りの姿勢をとると、ガルドが言う。

「やっぱ、いいとこのお嬢さんか？」

「い、いえ！ 大したことありません」

「まあ、聞かねえよ」

「ありがとうございます」

ガルドはなぜか、私の素性をいつさい聞いてこなかった。手伝いをしてくれれば良いと言うだけで、私はただ、掃除や料理をやって居ればよかった。

そして席について、私の料理を一口。

「……ふむ。うまいな」

「ほんとですか？」

「貴族の嬢ちゃんにしては上出来だ」

嬉しかった……。

それが最高級の褒め言葉に聞こえ、思わず涙ぐみそうになる。

だけど……、あれ？

いま、彼は貴族って言った。きっと私の素性なんて、バレているのだろう。食後。作業台の脇に戻ったガルドは、ごそごそと小さな袋を差し出してきた。

「今日の報酬だ。銀貨一枚」

「えっ……っ！」

受け取った瞬間、指先が震える。銀貨なんて大したこと無いって思ってた。でもこの銀貨の重みは、感じたことのない自分の価値の証明のように思えた。

「これで……宿が、借りられるかも……！」

思わず涙がこぼれそうになる。だけど銀貨の握りしめて俯く私に、彼が言う。

「嬢ちゃん」

「はい」

ガルドが、ぽつりと言った。

「行くあてはあんのかい？」

「……特には……ないです」

「嬢ちゃんが、嫌じゃ無ければだよ」

「はい……」

「ここで、住み込みで働かねえか？ 飯も寝床もある。報酬も、日払いで払う」

「……え？ いいんですか！」

「ここまでやれるなら、十分だ。俺もいろいろと手間が減って助かる」

私は一瞬だけ迷って、それから、深く頷いた。

「よろしくお願いします！ ……ここで、働かせてください！」

ガルドは「そうか」とだけ短く返し、直ぐに工具を手にとって仕事を始める。私も台所に戻り、食べた食器を洗うため井戸に。全部洗って片付けたところで、店の方から騒がしい話声が聞こえた。

「お客さんだ……」

私は廊下を進んで、店のドアに手をかけた。

いいのかな？

私はそこで止まり、一瞬ためらう。勝手にして良いとは言われているけど、店に出て良いとは言われていなかった。だけど私は、思い切って扉を開けて、顔を出してみる。するとそこにいた人達が突然出てきた私を見て、固まった。

「……あ、ごめんなさい」

するとそのうちの一人が、声を出した。

「お！　なんだなんだ！　ガルドさんよ！　すみに置けねえな」

「ああん？」

彼らの視線を追って、ガルドがこっちを振り向き、私と目があつた。

私はどうしていいか分からず、ぺこりと頭を下げる。

「めちやくちや別嬪じゃねえかよ。こんな嫁さんがいるなんて知らなかったぜ」

皮の鎧を着た男が私をみて、ウンウンと頷きながらそう言った。

「いや、嫁じゃねえ。住み込みで雇ったんだ」

「嫁じゃねえのか！ 住み込みって、こんな別嬪と暮らしてんのかよ！」

「昨日来たばかりだ」

「そうなのか！ へえ……こんな綺麗な人がねえ……」

見ればあと二人、男と女が店の中にいた。そしてガルドが、私に言う。

「うちは、こういう冒険者相手の武器屋なんだ。こう言う連中が毎日来る」

するとそれに対して、奥の女の人と言う。

「この人ね。腕がいいのよ。見た目も良いし、女つけないのか不思議なくらい。そう思っていたんだけどね、なぜかあなたは気に入られたらしいわね」

「わ、私なんて！ そんなことはありません」

「いや、それにしても美人だわ」

「そんな風におっしゃる、あなたもお美しいです」

私の返事を聞いて、冒険者達が顔を合わせる。

「あなた、随分言葉が綺麗ね？」

「あ、い、いえ！」

するとガルドが言う。

「詮索はやめにしてくれ。とにかく、この人は家政婦だ。ただ俺の身の回りを、世話してくれるだけだ。それ以上でも、それ以下でもねえよ」

「こーんな美人、うらやましいねえ」

「やめとけ。そんなじゃねえ」

そしてガルドは、その人達にさっさと武器を渡す。

「ほらよ、手入れはきっちりしてある」

「いつもながら流石だなあ」

「手は抜かねえよ」

「あ、そんじゃ、これがお代だ」

「ああ」

そしてガルドは、結構な額の代金を受け取り、皮の袋に入れた。
するともう一人の冒険者の男が、私に言った。

「この町じゃ、ガルドさんは顔が利く。ここで働けるなんて、ついてるぜ」

「は、はい！」

そして冒険者達は、店を出て行く。するとガルドが言う。

「あんた。冒険者と、話もできそうだな」

「社交は多少……」

貴族の基礎だしね、お茶会とかに誘われた時だけど。

「いままで俺が出かけた時は、店を締めなくちやならなかったんだよ」

「そうなんですネ？」

「俺がちよつと店をぬけるあいだ、店番やってくんねえかな？」

「み、店番ですか！」

「ギルドとかに行かなくちゃならない時もある。そんな時は、店を頼みてえ」

「や、やってみます！」

「頼む」

それから私は、ガルドが出かけた時に、店に出る事になった。この武器屋は、毎日入れ代わり立ち代わり冒険者たちがやってくる。大きな筋骨隆々の戦士に、機敏そうな盗賊、妖艶な女魔導士まで、武器屋のガルドを慕ってやってくる。その慕われかたからしても、彼が悪い人じゃないのは確かだった。

「ガルドさん、いつもの剣、砥いどいてくれた？」

「ああ。ついでに鍔のバランスも見直した。試してみろ」

「助かる！」

ぶつきらぼうだけど、確かな腕前。黙々と作業する姿は、職人の鑑だった。

……すごいな。やっぱり、こういう人が尊敬されるんだ……。

私はといえば、掃除洗濯、食事作り、在庫整理、そしてたまに受付の手伝い。男爵令嬢だった頃とはまるで違う、汗と生活の匂いのする日々。充実していて、落ちぶれそうになってたあの時が嘘のようだ。それでもガルドは喜んでくれる。

「お、嬢ちゃん。今夜はシチューか？」

「はい。今日のは肉多めです」

「……そうか。うれしいな」

たまにかけられる言葉が、なんだか嬉しい。ガルドは相変わらず無口だけど、食事を残さず食べてくれるし、洗濯物の畳み方も文句ひとつ言わない人だった。彼は、私に手を出そうとしない。私は、その優しさに少しずつ惹かれていった。

そして、その日も、夜は静かに更けていくはずだった。

私にガルドが作ってくれた寢床に寝ていたが、尿意をもよおして目が覚める。さっさと起きて厠に行き、用を足して戻ろうとした時だった。

カン……カン……

微かに響く金属音が、床の下から聞こえた。

え……？ 夜に仕事？ 下から？ なんで？

私は、床に耳を付け耳を澄ます。

地下室があるんだ……知らなかった。

そして私は、下に行く通路を探してみる。だけど何処にも見当たらなかった。

階段なんてないみたいだけど……。

だけど奥の部屋に入ってみると、いつも使わない収納棚が横にずれていた。その奥には、重たそうな鉄の扉があり、少し隙間が空いているように見える。妙に冷たい空気が、扉の隙間から這い出してきた。

そっとドアを引いて隙間から覗けば、下に続く階段が見えた。

……地下室だ……？　でも、なんとなく見ちゃダメな気がする……。

思わず扉を締めようとした、その瞬間、下から足音が聞こえてきた。

やば。

私は何故か後ろめたくなつて、そそくさとその部屋を出て自分の部屋に戻る。

……あれ、何だったんだろう？

するとドアがノックされた。

「はい」

ガチャリとガルドが入つて来る。

「奥の部屋に入ったな？」

「あ、あの、はい……」

「あの扉が動くと、音がする仕掛けになっているんだ」

「ごめんなさい。作業の音が聞こえたので」

「あそこは俺の大事な作業場なんだ。絶対に入るな……いいな？」

「……は、はい……」

怒鳴られたわけじゃないのに、心臓が強く跳ねる。けれど、あの目は……、何かを隠しているように思えた。その夜は、気になってあまり眠れなかった。

その次の日。

ガルドに入るなど言われた地下に続くあの鉄扉が、頭から離れなかった。

……絶対、なにかあるよね。

ガルドが、冒険者に見せる姿は確かに真摯で、実直で、尊敬できる人である。でも、時折ふとした瞬間に見せる、私に対しての鋭い視線や微妙な指先の動き。気にしないようにしようとしても、なぜか心に引っかかってしまう。

あの時の、私を見る目……何かを、測るように見ていた気がする。

そしてその夜。とにかく私は、どうしても地下室の事が気になってしまった。たぶん、好奇心というものだろう。ガルドが風呂に入っている時間を見計らい、私は奥の部屋へと忍び込んだ。戸棚をずらすと、そこに重たい鉄扉。

触れると、少し冷たい。私はそつと、その取っ手を回す。すると……。

「……開いた……？」

開かないと思っていた鉄扉は、まるで私が来るのを待っていたかのように、ゆっくりと開いた。地下へと続く石の階段。その奥からは、燭台の淡い灯りと、金属の臭い……そして、かすかに甘く湿った匂い。

……なん、だろ……？

階段を恐る恐る降りていくと、その部屋はまるで器具の陳列室のようだった。そこは、彼の特別な仕事の部屋なんだとすぐに分かる。吊り枷、手枷、拘束具、

奇妙な形の椅子と、先端に球状の付いた棒。そのほかにも、名前のわからない道具たちが、整然と並べられている。

「これ……拷問具よね……？」

指先が、道具の縄の結び目を撫でる。その瞬間、背後から重い扉の音がした。

ギイイ……ボタン。

「あっ！」

私は、つい慌てて振り向いた。

「言ったはずだぞ。入るな、ってな」

その声に、心臓が止まりそうになる。

「ガ……ガルドさん……っ……あ、あの、違うんです、私はその……」

「……違わねえよ。嬢ちゃん」

ガルドがゆっくりと歩み寄ってくる。目元はいつものままだ。でも声が低い。

「わ、私は、ここも掃除が必要なんじゃないかと思って！」

「俺が、入るなって言ったのか？」

肩を掴まれる。その大きな手の力に、びくりと体が跳ねる。

「武器屋ってのは、もちろん武器を作る所ではある。でも、それだけじゃない。王宮や軍隊なんかで使う拷問器具ってのは、こういう場所で作られてるんだよ」

「拷問器具……」

「そうだ。拷問と言っても、いろんなものがあるがな」

「……っ……怖い、です……」

いつものガルドじゃない、ちよつと怖い顔が見えた。

「……怖がつてる顔をされると、たまんねえな」

「え……？」

ガルドの指が、私の顎をすくう。

「これが俺の仕事だ。少し罰を受けてもらう、俺の作業場に入った罰としてな」

「仕事？ 罰？」

目を見開いた私に、ガルドは微笑んだ。でも、その彼の笑みはいつも通り。それが、あまりにも優しかったせいで……私は、逃げ出すことができなかった。

「ほんつとに、綺麗な顔だ」

「あの、あの」

「なあに、そんなに怖がることはねえよ」

「でも」

「いろいろ試させてもらう」

そう言ってガルドは、冷たい地下室でニヤリと笑うのだった。

第二章 武器屋の拷問部屋

ガルドは振り向いて、階段を上がって行く。分厚い鉄の扉が閉まる音がして、ガルドが階段を降りて来る。私の側に来ると同時に、背後から肩を掴まれ囁く。

「嬢ちゃん。悪いけど、これも協力してくれよな」

「これって、なに？」

「俺の、拘束具と魔道具の試験に付き合ってもらいたいんだ」

耳元にかかる低音。嗅ぎ慣れない鉄と油の匂いが、鼻先をかすめる。

「ま、待って……っ、なにするの？」

「前例がないものも作ってるからな、一度試さないといけないと思ってた」

「試す？」

「ああ、王宮に納品するのに、中途半端だとヤバイからな」

確かに、それはそうかもしれない。王宮の信頼を損ねれば、貴族だって大変なことになる。だからガルドの言う事は分かるが、それでも怖いものは怖い。怖くて、腰を引こうとした瞬間、ガルドの大きな手が私の片手を拘束した。

「手伝ってくれるんだろ？」

「そ、そうだけど……」

確かにそう言ったものの、この雰囲気は怖すぎた。でももう逃げ場はない。

「あ、あの！ あのだ！」

私がドギマギしてる間に、革のベルトが手に巻かれた。抵抗する間もなく、あつという間に両手を頭上で固定されている。その鎖は天井につながっていて、ガラガラと引っ張られ、ぶら下げられるような格好になる。

「や……っ、離して……っ、そんなのっ……!!」

「これは、こういう姿になるんだよ」

「まって！ ちょっと、まって！」

「ふふ。待たねえよ、こんなチャンスはないからな」

ガルドの笑う声が、喉の奥でくぐもる。

「ちょ、ちよつと」

「マジで、王宮に変なの納品するとヤバいんだ」

「それは、分るけど……」

ガルドの右手に持たれた金属つばい棒、それはいったい？

「そ、それ、こ、工具……？」

「いや、これは魔道具だ。嬢ちゃんの体も、調整が必要だろ？」

「体の調整……？」

そう言つて、ガルドは金属の棒を胸元でくるりと空回しした。

「そ、それなに？　ちよつと、まつて！」

私は慌てて身をよじるが、腕が吊るされているので逃げられない。寝間着の胸元に、ガルドの手がかけられた。ビリビリと布が裂かれる音が、部屋に響く。

「ごく……」

ガルドの喉が鳴る。肌が空気に晒され、突起した乳首が勝手に自己主張する。

「あ、あつ！　見ちゃダメ！」

そんな私の反応を、ガルドは見逃さない。

「見てみな。もう尖ってるじゃねえか。怖がってる顔して、身体は正直だな？」

言葉の刃が、羞恥心を刺す。

「やめて、そんなのっ、やめてっ……！ 見ないで！」

私は涙をにじませながら暴れるが、それは無力だった。ガルドの熱い指が、いきなり私の乳房に触れる。その触り方は、指先でそっと撫でるだけだった。その微細な刺激に、びく、と身体が跳ねる。

ただでさえ、裸を見られた事も無いのに、いきなり乳首を触られてしまった。

「ひっ、んっ……あっ……!!」

「焦らされるの、弱えんだ？　びくびく反応してるじゃねえか」

「むり、だからあ……」

彼はそのまま顔を胸元に近づけ、乳首まわりを円を描くように舌でなぞる。

「あっ！　あっ！」

ぷっくりと立った乳首をちろちろと転がされ、体がびくびく動いてしまう。

肌がざわざわと粟立ち、ガルドは最後には音を立てて吸いはじめた。

ちゅっ♡　ちゅぶ♡　ぶちゅ♡

「やああっ……あっ、あっ、そんなの、だめっ、だめええっ！」

乳首の甘くて苦しい感覚が、一気に脳を溶かす。抵抗しようとする意志が、肌に伝う快樂に引きちぎられる。ぶるぶると震えて、立っているのがやつと。

「やあ……立ってられないよお」

「だから吊るしてんだよ」

「やあ……」

「なら、こっちの乳首も……。均等に愛してやんねえとな」

言葉と同時に反対側の乳首にも熱が走る。一つの乳首は舌、もう一つは指。くちゅ、ちゅぷ、という淫靡な音が武器屋の地下、薄暗い空間にこだまする。

「こんなふうに、乳首だけでびくびくしてんの、恥ずかしいか？」

「い、いやあ……っ、やめてえ……っ、だって、こんなはずかし、だめ……！」

するとガルドは、二つの道具を持ち出して来た。

「えっ……それ、なに？」

「これは、貴族用に作った慰みの鈴だよ」

「えっ！ 慰みの鈴？」

叫びは無力だ。彼はその見慣れぬ道具を操作し、片方の乳首にグイッと挟む。

ぴくん！

「うあ。まって痛い……」

「どうだ？」

どうって言われても……。

「ほら。手伝ってくれるんだろ。感想を言ってくれ」

「ちよ……ちよっと痛い。でも……慣れてきた」

するとガルドは、私の反対側の乳首をグイっとつまんでくりくりした。

「ああ！」

チリンチリン。

私が身をよじれば、乳首につけられた鈴が鳴る。

「これはこういうものだ」

「や、やめてえ……」

だが願いもむなく、ガルドは反対側の乳首にも鈴をつけた。私が動くほど、チリンチリンと音を立てる。

「なるほど。悪くないかもしれん。貴族は変態が多いからな」

「ああ。とつてえ」

「だめだ。取れないようにしているんだ。直ぐ取れない試験をする必要がある」

ガルドは冷静だった。素敵なガルドの顔が、今は少し怖く感じた。

「じゃあ、下は、どうなってるのかな」

「えっ！ まって！」

「だから。またねえって」

下におりていく彼の指が、股間の下着の布越しに、私の熱を探り当てた。

「おやおや？ もうここ、しみ出してんじゃねえか」

「やだあ。さわらないで」

すると彼は、私の顔をじっと見あげてこう言う。

「触らないでか？ じゃあ……指じゃないやつで触ってやるよ、道具でな」

次に取り出されたのは、円筒になってる、先端が細かく震える魔道具だった。

「ほら。面白いだろう？」

「やだ、なに……それ……」

「これはこう使うんだよ」

そして彼がしゃがみ込む。私は思わず、足を組んで抵抗を試みた。

「ほら。足を広げて！」

「だめ……」

「使用感を試さねえと、商品にならねえじゃねえか」

そう言っつて、グイッと股を開かれて、ガルドが体を足の間に入れてきた。

「あっ！」

「いい子だ」

すると、その震える魔道具の先を、薄い下着越しに、ぺたりとつけられた。

ブンツ……。。

「ああ！」

微細な振動が、私のおまんこをまさぐっていく。最初は怖かったはずだった。

でも、それは逆に……心地のよさすら感じた。

「どうだ？　気持ちいいか？」

するするとおまんこの周辺を振動で震わせられ、私はつい声を上げてしまう。

「あん♡ あっ♡ うあ……はあっ♡♡」

「気持ちいいのか？　悪いのか？　ちゃんと言うんだ」

「……いい……」

「よし。成功かも。じゃあ次は直接あててやろう」

「えっ！　まって！　見ないで！　そこはだめ！」

「だめだ」

抵抗もむなしく、下着の布をぺろりとめくられた。

「やっぱ、嬢ちゃんはいいとこの娘なんだな。ここが、とても綺麗だ」

「やめ……て……」

「こんなに濡らしてか？」

ああ……

恥ずかしい。濡れたくないのに、私のおまんこは濡れているらしい。それを、しゃがんだガルドから至近距離でまじまじと見られている。